

令和 7 年度 学校経営の改革方針

鈴鹿市立鈴西小学校

I 目指す学校像

1 学校教育目標

仲間と関わり合いながら確かな学力と人権感覚を身に着け、たくましく生きる子の育成

2 めざす学校像

- ・ 子どもたちの多様な学びに応える学校
- ・ 保護者・地域とともに学び続ける学校

3 めざす子ども像

当たり前のように丁寧に取組み続け、以下の 3 つのように着実に成長する子どもを育成することを目指す。

(1) 確かな学力を身に着ける子

主体的に自ら課題を見つけ、課題の解決に向けて真剣に取り組む、周囲とかかわりながら粘り強く取り組む子

(2) 人権感覚を身に着ける子

自分と仲間を大切に思い、周囲とのよりよいかかわりのために行動できる子

(3) たくましい子

自らの心身の健康のため、よい生活習慣と運動習慣、豊かな感性を身に付ける子

II 成果と課題

1 学力保障について

(1) 成果

- ・ 令和 6 年度児童アンケートの項目「授業はわかる」におけるトップボックスが 1 回目から 2 回目にかけて 54.5%から 63.0%に上昇している。
- ・ 令和 6 年度児童アンケートの項目「自分意見や考えを伝えている」におけるトップボックスが 1 回目から 2 回目にかけて 35.1%から 50.0%に上昇している。
- ・ 令和 6 年度児童アンケートの項目「友だちと考えを伝え合いながら勉強している」における肯定的な回答が 1 回目から 2 回目にかけて 87.0%から 92.2%に上昇している。
- ・ 保護者アンケートの項目「お子さんは学校や家で本を読んでいる。」の肯定的回答が R5 から R6 にかけて 23 ポイント上昇している。
- ・ 朝の読書、読み聞かせ、おすすめ本 20 冊、読書週間、並行読書やふれあい読書などの取組により、1 人平均 50 冊以上を読むことができた。

(2) 課題

- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「友だちと考えを伝え合いながら勉強している」における肯定的な回答は増加しているが、トップボックスに限ると3.2ポイント減少している。
- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「本を読むことは好きである」における肯定的回答が1回目から2回目にかけて79.2%から76.0%に減少している。
- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「本を読むことは好きである」における肯定的回答が1回目から2回目にかけて79.2%から76.0%に減少している。
- ・ 保護者アンケートの項目「お子さんは家庭学習をする習慣がついてきた。」の肯定的回答がR5からR6にかけて22.4ポイント下降している。
- ・ 5年生におけるみえスタディ・チェックの平均正答率について、全ての教科で上昇が見られなかった。

(3) 成果と課題にかかわって、今後必要と考えられる取組等について

- ・ 昨年度の取組により、子どもたちは「主体的な学び」の価値について理解し始めている。しかし、学習内容の理解について保護者は実感できておらず、みえスタディ・チェックの結果にも結び付いていない。

このことから、「子ども主体の授業」を継続しつつ学習内容の理解に確実につながる授業について研修を深めていく必要がある。

- ・ 読書の量は増えているものの、読書好きが減少傾向にあるので「読書は楽しいもの」と認識させる取組が必要である。
- ・ 家庭学習の習慣について、定着に実感がない傾向にある。子どもたちが必要間を感じるような家庭学習の取組が必要である。
- ・ 全国学力学習調査やみえスタディ・チェックの結果をもとに子どもたちに足りない力について分析し、授業は充実したものの数値としての成果は上がらなかった。このことを真摯に捉え、さらなる授業改善に全校で取り組む必要がある。

2 人権教育及び非認知能力について

(1) 成果

- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「クラスの仲間と楽しく過ごすことができています」における肯定的回答が1回目から2回目にかけて87.0%から94.2%に上昇している。
- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「私は、得意なことやよいところがある。」における肯定的回答が1回目から2回目にかけて91.6%から96.1%に上昇している。
- ・ 保護者アンケートの項目「お子さんは、自分のことに自信をもっている。」「学校は、子どもが自分のことに自信をもてるよう指導している。」における肯定的回答が両方ともR5からR6にかけて大幅に上昇している。
- ・ 1年生において、特別支援学級の理解につながる学習活動を実践し、通常学級の児童における特別支援学級及び在籍児童への理解が深まった。
- ・ ポジティブメッセージカードの取組を高学年限定から全学年に広げて実

施することができた。

(2) 課題

- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「学校に行くのがたのしい」におけるトップボックスが1回目から2回目にかけて54.5%から53.2%に減少しており、肯定的回答についても変化が見られなかった。
- ・ 令和6年度児童アンケートの項目「私は、得意なことやよいところがある。」についてトップボックスに限ると1回目から2回目にかけて73.4%から68.2%と大きく減少している。
- ・ 人権フォーラムについて、積極的に参加する姿勢は見られたが目的を理解していない発言をする姿もあった。

(3) 成果と課題にかかわって、今後必要と考えられる取組等について

- ・ 子どもたちは、自己肯定感が高まっているものの具体的に何が良くなっているのかを認識できておらず、「できたこと」が本物の充実感にはつながっていないのではないかと考えられる。

このことから、授業はもちろん委員会活動や学校や学年等の行事における活動で、自主的な活動に取り組ませるとともに成果を実感させる意図的で計画的な取り組みが必要と考える。

- ・ 特別支援学級への新入児や転籍児童における理解を深めるため、各学年における特別支援学級理解の取組を拡げていく必要がある。
- ・ 人権課題を「自分事」として捉え、課題を解決するためにどうすべきか自分たちで考える姿勢を育て、積極的に考えを発信するための授業や取り組みの実践を重ねていく必要がある。また、人権フォーラムについて、人権課題を「自分事」として考える機会の一つとして生かすようにする必要がある。
- ・ 子どもたちの、非認知能力の高まりをさらに促すため、ポジティブメッセージカードの取組を継続するとともに、その他の手立てについて指導者が研修等により実践を試みる。

3 生徒指導について

(1) 成果

- ・ いじめアンケートについて、1学期から3学期にかけて認知件数に増減はないものの、未解決の事案はない。
- ・ 数値のデータはないが、子ども同士のトラブルにおける未解決事案についても存在しない。
- ・ 令和6年度より情報共有シートを作成し、毎月「気になる児童」について全職員で情報共有をすることにより、統一感のある指導及び見守りを実施することができた。
- ・ 長期欠席児童について、年間30日を超える児童については、R5からR6にかけて5人から3人に減少した。

(2) 課題

- ・ 令和6年度の児童及び保護者のアンケート双方における「あいさつ」「交通ルールや学校の決まり」に関連する肯定的な数値の上昇は見られず、客観的

な成果はなかったと言わざるを得ない。

- ・ 染毛やシャープペンシル等の持ち込みについて、統一感をもった指導がなされず、年度末に文書を配付して学校の決まりについて児童及び保護者に確認を行うこととなってしまった。

(3) 成果と課題にかかわって、今後必要と考えられる取組等について

- ・ いじめや問題行動については、早期発見及び早期対応ができていたため重大な事案になる前に解決できていると考えられることから、現在の体制を今後も維持していくことが重要である。
- ・ あいさつや規範意識については、子どもたちの規範意識を高める取組が必要であると考ええる。
- ・ 「しいの実『鈴西っ子の約束改訂号』」を令和7年3月に発行し、児童及び保護者に対して学校の決まりについて確認を促したことから、指導者側も意識を新たにし、全職員で統一感をもった指導を徹底していく取組が必要である。
- ・ 長期欠席について、休み始めの段階で担任からの声掛けを進めていた成果から減少したものの、不登校傾向のある児童は存在する。新たな不登校を生まないためにも①早期の対応 ②関係機関との連携 ③登校の意欲を高める授業や行事等の取組 を継続的に進めていく必要がある。

4 その他の活動について

(1) 学習ボランティアの活用

- ・ 令和6年度ボランティアの募集を地域に広げ、保護者及び地域より31人のボランティアの方に協力を得ることができた。
- ・ ボランティアさんの申し込みが増えたことで、昨年度までは3学年でしかできなかった読み聞かせボランティアが全ての学年で実施することができた。
- ・ また、学習面においても図工の鋸を使った制作活動や生活科におけるさつまいも栽培、社会科における地域探検等でボランティアさんの協力をいただき学習活動の充実につながった。

(2) 補充学習

- ・ モジュール学習の活用が進み、授業と連動した補充的な学習にも有効利用できている。
- ・ 対象者を絞ったサマースクールを2日間行い、基礎学力の定着を図った。また、中学校と連携し、チューターとして鈴峰中学校の生徒を招くことで児童の学習意欲が高まった。

(3) キャリア教育

- ・ 系統立てた年間指導計画に位置付け、教科と関連させることができた
- ・ サーチ学習で地元の産業である「植木産業」を題材としたことで、農業組合法人鈴鹿植木組合の方を講師として招へいし、地域の再発見につながった。また、植木の良さや産業に従事するみなさんの思いについて「森のまつり」で発表することができた。

(4) 特別支援教育

- ・ 特別支援教育の視点を取り入れた授業（視覚的な教材・教具の工夫、教室環境への配慮、板書の工夫等）に取り組むとともに、支援が必要な児童に対して組織的な対応を行っている。
- ・ 特別支援コーディネーターが中心となり、必要に応じて校内支援会議をもち（年間 40 回）、支援の在り方について協議したり、支援学級への転籍を勧めたりした。
- ・ 困り感のある児童や保護者を積極的に関係機関につなぎ、支援の方策について共に考えていくことで、きめ細かい支援につなげている。
- ・ 中学校へ進学する児童と新入児童の支援会議を行い、保護者の安心感につながった。

(5) 安心・安全の取組

- ・ 通学距離が長く家もまばらで人通りも少なく、子どもたちの安全が心配される。
- ・ 登下校指導では、PTAや老人会、町づくり協議会を中心に、保護者・地域の方に協力していただいている。今年度も継続をお願いする。
- ・ 避難訓練、引き渡し訓練、交通安全教室など、全校で取り組んだ。避難訓練について、決まったルートを避難するだけでなく、今年度は避難時における突発的な事象が起こったときの行動や行動を検証できる訓練を行っていく。

(6) 開かれた学校づくり

- ・ 交通安全教室、運動会、森のまつりなどの行事では、地域・保護者が非常に協力的である。令和 7 年度は、鈴峰中校区 4 小学校の 5 年生を鈴西小に集めて自然教室を行う予定となっており、地域のボランティアの方にも協力を仰ぐ予定となっている。
- ・ 学校だよりなどで積極的に発信することで、保護者や地域の方々に学校での子どもたちの姿を共有でき、共に子どもを育てていくという意識が高まっている。（保護者アンケート「学校は、通信等で家庭への情報提供を積極的に行っている。」 97.3%）

Ⅲ 本年度の行動計画

【 学力保障と向上 】

(1) 授業改善と研修の充実

○基礎・基本の確実な定着を図り、主体的な学び及び個に応じたきめ細かな指導による個別最適な学習の実現を図る。また、教科学習でのグループ学習により対話的で深い学びの実現をめざす。

- ・ 学習規律を確立する。 ・ グループでの対話による学習を進める。
- ・ 学習の足跡となるように、ノート指導を充実させる。
- ・ 話す力、聞く力、書く力を身に付けさせる。

・モジュール学習について、基礎基本定着の機会と捉え学習内容を整理し、取り組む。

○教科学習での活用など授業での ICT 機器の活用を進め、授業の質の向上や子どもたちの多様な学びの実現をめざす。また、家庭での効果的な活用についても検討し、端末の日常的な持ち帰りの推進を図る。

○公開授業や授業参観に積極的に取り組み、教師相互の授業力の向上を図る。

○全国学力学習状況調査やみえスタディ・チェック、全国体力・運動能力・運動習慣等調査で成果や課題を分析し共有することにより、学力や体力向上に向けた対策が早期に実行できるよう取り組む。

○課題やめあてをもった問題解決学習や体験的な学習の機会をできるだけ取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」を通して、生涯にわたって能動的に学び続けられる資質・能力を育む。

○効果的なモジュール学習（15 分間）の活用をさらに探る。

（２）学習ボランティアの活用

○ボランティアの様々な場面での活用を探り、充実を図る。

（３）補充学習の推進

○学習理解に課題がある子どもたちを中心に「学びっこタイム」では、低学年、高学年の縦割り班で、関わり合い・学び合いを通して学びに向かう意欲の向上を図る。

○サマースクールを実施し、基礎的な学習の確実な定着を目指す。

（４）家庭学習の定着

○10 分×学年の家庭学習の定着と、高学年の自主学習を推進する。

○全学年で、3 点セット（音読・漢字・計算）に取り組む。

○自主学習は発達段階に応じて、全学年で「自ら課題を見つけて解決できる」ことをめざして取り組む。また、検索性のワークシート等の活用を進める。

○書く力が身に付くように作文・日記に取り組む。

○中学校区で協働して、家庭学習の推進に取り組む。

（５）キャリア教育

○教科と関連させ系統立てた年間計画に沿って、夢工房やゲストティーチャー等の活用を図る。

○地域の方をゲストティーチャーとする、地域に根差した学習に取り組む。

○自然体験・環境教育・SDGs 活動を推進する。

（６）読書活動の推進

○「おすすめの本 20 冊（高学年は 15 冊）」の完読をめざす。

○図書館利用を推進し、1～4 年年間平均 50 冊以上、5・6 年年間平均 40 冊以上の貸し出しをめざすとともに、家庭と協力し、読書習慣の定着を図り、相対的にスクリーンタイムを減らす。

○巡回指導員の活用を図り、図書館を利用した授業を各学年で実施する。

○サーチ学習等での情報センターとしての図書館利用をめざす。

【 特別支援教育 】

- 特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員、スクールカウンセラー等が連携し、支援が必要な子どもへのきめ細やかな支援を行う。
- 個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成を推進し、支援が必要な子どもへのとぎれのない支援を充実する。
- 校内委員会・校内支援会議を充実し、個の課題に応じた支援を充実する。
- 必要に応じて関係機関と連携した支援会議を開催する。

【 非認知能力の育成】

- お互いのよさや違いに気付き、認め合い、高め合う態度を育成し非認知能力の育成を図る。
- 非認知能力アンケートを定期的実施し、結果について中学校区で分析する。分析したことで掘んだ課題について解決する手立てを中学校区で検討し、実践に生かす。

【 人権教育 】

- 道徳科を中心に、各教科や総合的な学習の時間における様々な体験活動との関連を図り、豊かな感性をもち自律した子どもを育てる。
- 鈴峰中学校区内の学校や地域が連携し、6年生代表参加の人権フォーラムを開催する。
- 特別支援学級「ひまわり学級」に関する理解を、全校及び保護者、地域に対して進めていきたい。

【 生徒指導 】

- 気持ちのよいあいさつと、相手の気持ちを考えた優しい言葉遣いができるように児童会活動を通して働きかける。
- 「早寝・早起き・朝ごはん運動」に取り組み、基本的生活習慣の定着を図る。
- 学校のきまりの意味をよく考えさせ、自ら守ろうとする意欲を高め、全教職員による統一された指導を行う。
- 「わかる授業」・「いじめ・暴力を許さない」・「個に応じた指導と配慮」に力点を置き、新たな不登校を生まない魅力ある学校づくりを目指す。
- 教職員が児童理解を深め、受容・共感の姿勢で児童との関わりを深める。

【 健康、安全・安心の取組 】

- PTAや地域と連携して、登下校における子どもたちの安全を確保する。
- 関係機関と連携し、避難訓練、引き渡し訓練、防犯教室、交通安全教室等を実施する。
- 一斉下校、集会等で笛の携帯点検を行う。
- 保護者や地域との連携を深め、登下校の安全確認活動を推進する。
- 問題行動の未然防止に向け、「相談・連絡・報告」を徹底する。「常に先手を!!」また、問題行動の記録を残し、それを元にケース会議を開催し事例に学ぶ。

【 開かれた学校づくり 】

- 学校運営協議会を年6回開催し、保護者・地域・学校の連携と協働の下で学校経営を推進する。
- 運動会、森のまつり、児童集会、授業参観等を通して、保護者や地域の方々に学校の教育活動を公開する。
- 学校だより、学年・学級通信、保健・図書館だより等を通して、保護者や地域に情報発信する。
- 各地域行事での交流などを通して、地域との交流を深める。
- 学校・子ども・保護者・学校運営協議会等の自己評価・学校関係者評価を実施し、評価結果を公表し、学校経営の改善に活かす。
- 地域学習における地域人材の積極的な活用を推進する。

【 学校における働き改革 】

〈今年度の目標〉

A ①	1人当たりの月平均時間外労働	30時間未満
②	年360時間を超える時間外労働者数	年間のべ0人
③	月30時間を超える時間外労働者の延べ人数	20人
※	昨年度月45時間を超える時間外労働者の延べ人数	0人
	昨年度月30時間を超える時間外労働者の延べ人数	25人
B	職場における月平均の年間休暇取得日数	1.5日以上
※	昨年度月平均の年間休暇取得日数	1.44日
C ①	定時退校日に定時に退校できた職員の割合	90%以上
※	昨年度定時に退校できた職員の割合	93.5%
②	放課後に開催して60分以内に終了した会議の割合	70%以上
※	昨年度60分以内に終了した会議の割合	66.7%

- 学校・教師が担う業務の明確化の視点から、業務を見直す。
- 目標とする退勤時刻の見える化を通して、「勤務時間」を意識した働き方を継続する。
- 「定時退校日」を設定（月に2回は必ず実施する）する。設定日に定時に退校する職員の割合90%を実現し、教職員が心身ともにゆとりをもつことで、教材研究を深め、子ども一人ひとりに応じた指導の実現をめざす。
- 学期はじめと終わりに短縮日課を設定し、授業時間とともに教職員の成績処理等の時間を確保する。